

四手井綱英先生を偲んで

京都大学名誉教授 渡 辺 弘 之

四手井綱英先生の略歴についてはすでに布谷知夫さんがK O N C (関西自然保護機構会誌 31巻2号)に紹介されたので、ここには重複しないご業績のことを書いてみたい。四手井先生の筆の早いことは確かだった。大学院生時代、夜遅く残っていると、よく「これ清書しといてんか」と、挿入や削除の入り組んだ原稿をおいて帰られ、清書のお手伝いをしたことがあった。当時、「いいたいことをいわせてもらおう」でなく、「いいにくいことをいわせてもらおう」という連載ものを執筆されていた。私の手元にもたくさん先生の著書があるが、先生ご自身、どんなものを出版されたのか、どうもそんなリストなどつくっていなかったようだ。そんなことには無頓着、こだわらなかった方だったということだろう。それでも著作を知りたくて京都大学図書館や森林総合研究所資料館所蔵図書などを調べてみた。一般に知られていない著作(著書・編著書)もあるので、ここに列挙してみよう。参考になるはずだ。

- (1) 林業雑考 秋田営林局 (1952)
- (2) 林分密度の問題 日本林業技術協会(1956)
- (3) 林業実験実習書(岡崎文彬・四手井綱英編) 朝倉書店 (1956)
- (4) 積雪と森林(四手井綱英・高橋喜平) 林野庁研究指導部 (1951)
- (5) アカマツ林の造成 地球出版 (1963)
- (6) 木頭林業の発展と日野家の林業経営(四手井綱英・半田良一編著) 農林出版 (1969)

- (7) 森林保育と生態 農林出版 (1976)
- (8) 森林の価値 共立出版 (1973)
- (9) 松と人生(四手井綱英・佐野宗一編著) 明玄書房 (1973)
- (10) 生態系の保護と管理 (I) (生態系講座35a) 共立出版 (1973)
- (11) きのこの手帖(四手井淑子・四手井綱英) ナカニシヤ出版 (1973)
- (12) 自然保護・森林・森林生態 農林出版 (1974)
- (13) ヒノキ林(四手井綱英・赤井龍男・斉藤秀樹・河原輝彦編著) 地球社 (1974)
- (14) 日本の森林 国有林を荒廃させるもの 中央公論社 (1974)
- (15) 山と森と人生と スキージャーナル(1978)
- (16) 森林保護学 朝倉書店 (1976)
- (17) きのか風土記(四手井綱英・四手井淑子) 毎日新聞社 (1976)
- (18) 追われる「けもの」たち(四手井綱英・川村俊蔵編著) 築地書館 (1976)
- (19) 森の生態学 講談社 (1976)
- (20) もりやはやし 中央公論社 (1974), 筑摩書房 (2009再版)
- (21) 山と森の人々 中央公論社 (1975)
- (22) 森林の生態学 講談社 (1976)
- (23) 落葉広葉樹図鑑(四手井綱英・斉藤新一郎) 共立出版 (1978)
- (24) 森林をみる心「森林と文化」国際シンポジ



写真1. 花の万博記念賞を受賞された。

ウムからの報告 共立出版 (1984)

- (25) 森林 I 法政大学出版局 (1985)
- (26) 雑学雑記 私費 (1986)
- (27) 20 x 4 年記抄 私費 (1991)
- (28) 熱帯雨林を考える (四手井綱英・吉良竜夫監修) 人文書院 (1992)
- (29) 言い残したい森の話 人文書院 (1993)
- (30) 森に学ぶ エコロジーから自然保護へ 海鳴社 (1993)
- (31) 下鴨神社紬の森 ナカニシヤ (1993)
- (32) 森林 II 法政大学出版局 (1998)
- (33) 森林 III 法政大学出版局 (2000)
- (34) 環境共生社会と森林生態学 環境共生社会システム研究所 (2002)
- (35) 森林はモリやハヤシではない 私の森林論 ナカニシヤ出版 (2006)
- (36) これからの日本の森林づくり ナカニシヤ出版 (2009) などである。

森まゆみ 森の人 四手井綱英の九十年 晶文社 (2001) も四手井先生との対談なので、これも著書に入れてもいいであろう。これ以外にもあるのかも知れない。遺漏があればお教え願いたい。これだけの著作があれば、当然、分担執筆もたくさんあるはずだが、これは検索の仕様がな。

この著作をみても森林の生態・自然保護がもちろん主であるが、積雪、けもの、里山、鎮守の森

などもある。幅広い知識と興味をお持ちだったことがわかる。それは日本学術会議会員だったほか、雪氷学会、林学会、生態学会、熱帯生態学会、土壤動物学会などの名誉会員に推挙されていたことにも表れている。もちろん、関西自然保護機構の名誉会員でもあった。日本雪氷学会賞、日本農学賞および読売農学賞、京都ヒューマン賞ヒューマン大賞、松下幸之助花の万博記念賞、京都府文化賞特別功労賞、南方熊楠賞、勲2等瑞宝章などを受賞されているが、このほかにもあるかも知れない。

自然保護活動にも積極的に参加された。対立する意見、データ・研究調査不足の中での保護が開発かの論議の中に乞われて入られた。京阪奈丘陵のオオタカ、新宮の浮島、和泉葛城山系のブナ林保護問題などである。京都・山科区音羽山の山間埋め立て処分地問題では保賀昭雄さんのミドリセンチコガネ分布・生態調査や、久山喜久雄さんが主宰される法然院森の教室の活動なども支援された。大学以外にも四手井先生の自称弟子、四手井ファンがたくさんいる理由である。



写真2. 会長当時の四手井先生。

鎮守の森（社叢・社寺林）研究への貢献も記憶されているものであろう。土井林学振興会の研究助成を受けて四手井先生は昭和47年（1972）緑地研究会を発足させて、23府県、約800ヵ所の社寺林調査を実施し、「社寺林の研究」としてその記録を公表されたが、財政事情により全国調査終了前に中止されたのは残念であった。当時、すでに宮の森の維持・保存の意義、生態学的意義、社会的意義を強調されているし、その後には下鴨神社の森林・生物調査を主導され、その成果が四手井綱英（編）「下鴨神社 糺の森」として出版されている。社叢学会の創設は平成14年（2002）のこと、四手井先生は顧問に推挙されていた。

関西自然保護機構（KONC）では発足（1978）時より1995年まで会長を務められ、その後、名誉会員に推挙されていたが、1995年、松下幸之助花の万博記念賞を受賞され、その賞金の一部を関西自然保護機構に寄付された。当時すでにきびしい財政下にあったことを知っておられ、その支援のためとのお気持ちであったのであろうが、理事会ではやはり有意義に使わせてもらおうと「四手井

賞」をつくることにした。ご報告すると、「ああ、そうか、すぐになくなってしまふ金額やで」とおっしゃった。受賞の若い方にそのご意志を受け継いでいただいているようで、先生もお喜びになっておられよう。

四手井先生があるいは気にかけておられるのは、ご自宅のセンペル・セコイア（*Sequoia sempervirens*）だろう。下り新幹線で、「まもなく京都です」とのアナウンスが入る山科で、進行方向右側、あるいは、京都から琵琶湖線で東山トンネルを抜け、山科に入り、京都薬科大学の先に少し遠いが住宅地の中に大きな樹木が立っているのに気づかれよう。四手井先生お手植えの巨木、現在、「山科区民誇りの木」に指定され、京都市発行の「区民の誇りの木 山科区」編に「厨子奥尾上町センペルセコイア」として写真が掲載されている。高さ23m、幹周囲2.5mとされているものだ。レグナンス・ユーカリ（*Eucalyptus regnans*）とともに、世界で一番背が高くなる樹木とされているもの、せいせいと伸ばしてやりたい。

